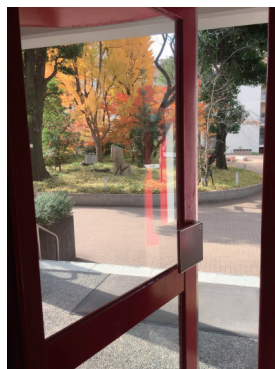


Bloom  
as  
a leader.  
SINCE 1901  
Japan Women's University

# 図書館だより

## 目次

読書の秋	——白杵 陽	1
日本女子大学叢書の紹介		
日本女子大学日本文学科編『定家のもたらしたもの』	——石井 倫子	2
Early English Books Online (EEBO) の魅力	——佐藤 達郎	3
図書館によせて (歴代図書館長より)		
「取りて読め」	——新海 邦治	4
知の兵士と館員	——西山 力也	4
図書館の思い出	——島崎 恒藏	5
目白図書館によせて	——平館 英子	5
年表と写真で振り返る図書館 (目白)		6
2017(平成29)年度上代タノ平和文庫購入資料紹介		7
平成30年度夏期スクーリング開館について	——中澤 恵子	8



回転ドアより秋の中庭を望む (目白)

## 読書の秋

白杵 陽

読書の秋である。「読書の秋」といわれるようになったのは、唐代の詩人・韓愈の詩「符読書城南詩」の中にある「灯火親しむべし」が広く知られるようになってからだという。涼しくて夜の長い秋は灯火の下での読書に適しているのである。学生の皆さんもこんな季節だからこそ、ぜひ本を手にとってもらいたいものである。

さて、過日、所用で香川県の県庁所在地である高松市を訪れる機会があった。バスで高松空港からJR高松駅に向かう途中で菊池寛の名前が冠された通りがあって、ちょっと驚いた。たいへん著名な小説家・菊池寛(1888～1948年)がこの四国の高松出身だということを知らなかったからである。

皆さんのなかにも菊池寛の小説を読んだことがある人もあるだろう。菊池寛は文藝春秋社を創設した実業家としての顔ももっている。あるいは今年はユーミンこと松任谷由実さんが菊池寛賞を受賞したことがニュースとして話題になった。ただ、ユーミンは少々古い世代に属するミュージシャンなので知らないという人もきっといるだろう。

私自身は小説家としての菊池寛について名前だけは小学校の時から知っていた。といっても当時私だけが特別に知っていたわけではない。私の生まれ故郷のすぐ近くの観光地が、菊池寛の小説『恩讐の彼方に』の舞台になっていたからである。その小説は、大分県の耶馬溪というところにある「青の洞門」を掘った曹洞宗の禅海和尚をモデルにしたといわれる。禅海は30年以上の歳月をかけて洞門を掘ったのである。洞門が掘られる以前には川沿いの崖を通るときにそこから転落して多くの人が亡くなったからである。高い絶壁の崖をもつ羅漢山は景勝地としても知られているが、その中腹には、五百羅漢をはじめ三千体以上の石仏がある曹洞宗の羅漢寺という名刹がある。

もちろん、『恩讐の彼方に』自体は小説でフィクションであるので小説の中で描かれる敵討ちは史実ではないが、小説を読むという楽しみが中心で小中学生のころの私には何が事実で何がフィクションであるかはまったく念頭になかったのである。

このような歴史小説をめぐる論争は森鴎外『歴史其儘と歴史離れ』(『森鴎外全集』第14巻、ちくま文庫、1996年)以来、連綿として続いている。特にチンギス=ハン(成吉思汗)を描いた井上靖(1907～1991年)の小説『蒼き狼』を、同じ作家である大岡昇平(1909～1988年)が史料を恣意的に改変したと批判して、かつてずいぶんと注目された。大岡は鴎外の『境事件』についての史実の扱い方に関しても厳しく論難して、徹底した史料批判に基づいて、自ら『堺港攘夷始末』(中公文庫、1992年)を亡くなる直前に著したのである。

ちなみに、堺事件とは戊辰戦争の起こった1868年3月8日(慶応4年2月15日)、土佐藩士が和泉国堺(現大阪府堺市)でフランス水兵11名を攘夷のために殺害した事件であり、明治政府は賠償金15万ドルを支払い、関係者の切腹を含む処刑を堺の妙国寺で行った。

もちろん、私自身も史学科に身を置く以上、このような歴史小説をめぐる論争に無関心であるわけにはいかない。皆さんも歴史的事実に基づいて書かれたフィクションとしての歴史小説を楽しみつつ読んでいただきながら、改めて「史実」とは何かを考える時間を作ってほしいと思う。

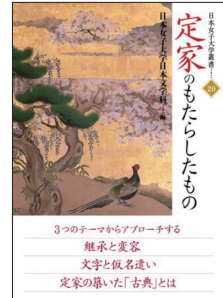
(図書館長・史学科教授)

日本女子大学日本文学科編

## 『定家のもたらしたもの』（日本女子大学叢書20）

石井 倫子

日本文学科・日本文学専攻では、毎年、学術交流企画で幾つかのシンポジウムや講演会を開催している。ちょうどその頃、漫画『うた恋い。』『ちはやふる』がブームとなり、『百人一首』やその撰者である藤原定家に対する関心が高まっていたことから、定家が文学史上・文化史上に残した足跡を明らかにすべく、2013年度から三年がかりで「定家のもたらしたもの」という大きなテーマに取り組んできた。活字化を望む声が多く寄せられたことに後押しされ、その成果を一冊にまとめたものが本書である。玉稿を賜ったご登壇者の先生方に改めて感謝申し上げたい。



第一回「定家のもたらしたもの—継承と変容—」（2014年3月22日）では、定家の構築した和歌の世界がその後の文芸の世界でどのように継承・変容していったかを和歌と能における受容という点から明らかにした。渡部泰明氏（東京大学）は『百人一首』の定家詠「来ぬ人を～」の背後に『源氏物語』須磨巻の世界があることに端を発し、定家の詠歌におけるさまざまな連想の方法を詳述し、村尾誠一氏（東京外国語大学教授）は「定家宗」を自称する定家フリークの歌人正徹の和歌にみる定家からの継承と変容を示す。味方健氏（シテ方観世流能楽師）は能役者・金春禅竹の伝書と能を彼が傾倒していた定家の作品から読み解き、ポール・アトキンス氏（ワシントン大学教授）は定家を素材にしたさまざまな能を紹介し、これら定家物の能における〈定家〉の特徴を説く。

第二回「定家のもたらしたもの—文字と仮名遣い—」（2015年3月14日）では、定家の特徴的な「文字」とその用法に焦点を当てた。坂本清恵氏（本学教授）は定家仮名遣いが①アクセントの高低による原理を尊重・②実例を規範として墨守 という二通りの形で継承されたことを述べ、遠藤邦基氏（奈良女子大学名誉教授）は定家監督書写本を擬して作成された「擬定家本」に定家仮名遣いの原理が働いていたと論ずる。別府節子氏（出光美術館学芸員（講演会時）、実践女子大学研究推進機構研究員）は「定家様」と呼ばれる書様の特徴を指摘し、その生成が御子左家の古典籍の書写活動を通じて導かれたことを具体例に基づいて示す。これらを踏まえ、定家様を実際に揮毫する小堀宗実氏（遠州茶道宗家十三世家元）は、小堀遠州を流祖とする遠州流茶道における定家様の継承と受容の諸相について語る。

第三回「定家のもたらしたもの—定家の築いた「古典」とは—」（2016年3月12日）では、定家を軸に据え、「古典」の成立と展開の様相を概観した。伊井春樹氏（阪急文化財団逸翁美術館館長・大阪大学名誉教授）は、「青表紙本」と呼ばれる定家校訂の『源氏物語』本文を継承するとされる大島本に時代を異にする多くの書き込みがあることから、大島本が『源氏物語』の中心的テキストとして扱われている現況への疑義を呈する。浅田徹氏（お茶の水女子大学教授）は a 歌集類・b 『枕草子』や『大和物語』（過去の事実の記録）・c 『源氏物語』それぞれで定家勸物の性格が異なる点に着目し、定家が「古典」として各作品の中に学ぶべき何かを見出していったことを指摘する。杉本まゆ子氏（宮内庁書陵部研究官）は、二条家によって行われてきた古今伝受において定家の詠草や著作、定家仮託伝書の利用が多くみられること、御所伝受前期は血脈や相伝の意識がみられるのに対して中期以降は『詠歌大概』が重視されていることを明らかにする。

以上、三つのテーマを核に、第一線で活躍する研究者・実技者たちによって「定家のもたらしたもの」が次々と明らかにされ、知的好奇心を刺激される充実した会となった。熱気に溢れた当日の様子を本書から感じ取っていただければ幸いです。

(日本文学科教授)

## Early English Books Online の魅力

佐藤 達郎

Early English Books Online (以下 EEBO) は、1473年から1700年にイギリスで出版 (あるいは英語で記述・刊行) されたすべての印刷物をウェブサイトを提供する貴重なデータベースです。収録資料は約13万点にのぼり、文学作品のみならず、政治、経済、歴史、言語、科学、美術、音楽などさまざまな研究分野に関わる資料を網羅しています。

収録資料数からもわかるように、本データベースの導入によって、本学の学生及び教員は、これまで本学や日本の図書館ではアクセスすることのできなかった膨大な第一次資料を閲覧することが可能となりました。現在、このデータベースを導入している日本の大学図書館は限られているのですが、このデータベースの有無によって、学生や教員のイギリス・ヨーロッパに関する研究の質が左右されるといっても過言ではありません。この度導入された EEBO は、本大学にとってもきわめて貴重な知的財産となるでしょう。

EEBO は、イギリスに関する研究・教育にのみ資するものではありません。上述のように、この時代にイギリスで刊行されたすべての出版物に関するデータベースですから、ヨーロッパを始めとする世界各地の歴史についても、あるいは建築、食生活、衣服をはじめとする文化研究や科学史においても、有益な一次資料を提供してくれるはずです。

私が大学院生の頃は、これら約13万点の資料は、まだ電子化されていませんでした。すべての資料はマイクロフィルムに取められ、カタログ中のタイトルを手掛かりにしながら、読むべき資料を特定し、その資料が取められたマイクロフィルムをマイクロリーダーで読み、必要箇所をコピーする。こうした作業は、半日、いや時には数日かかることもありました。ところが、この EEBO によって、そうした作業が瞬時に可能となったのです。しかも読むべき資料は PDF として、ハードディスクに保管できます。このことは、我々研究者にとって、「革命」といえるほどの大きな影響をもたらしました。このデータベースを使える環境にあることが、研究者にとって必須条件となったわけです。

このように研究上きわめて有益な EEBO ですが、使いこなせるようになるまでには、資料を読みこなす英語力に加えて、ある程度のコツが必要であり、多くの学生は、このコツをつかめないうちに挫折してしまいます。例えば、EEBO の検索画面は、フリーワードを打ち込むようになっていますが、このフリーワードで検索するだけではいささか限界があります。そこで、さらに詳細検索をクリックすると、フリーワードとともに、作品のタイトル、著者名、出版年などと掛け合わせて検索できる画面が出てきます。「シェイクスピア『ハムレット』におけるメランコリー」という研究テーマに取り組んでいる学生がいるとしましょう。『ハムレット』の創作年代は、1600年-1602年と推定されていますから、フリーワードとして“melancholy”をいれ、出版年を1600-1602と設定します。すると、“melancholy”という語を使用している『ハムレット』と同時代の資料が52件あることがわかります。これらの資料で使われている melancholy の語義を分析していくと、これまで気がつかなかった『ハムレット』とこれら同時代の資料との思わぬ関連性が浮きぼりになり、それが研究上の発見につながることもあるのです。無論、すべてが成功するわけではありませんが、少なくとも、こうした検索の仕方は、EEBO ならではの検索方法であり、さまざまなキーワードを駆使して、新たな歴史的資料に遭遇することは、まさに研究上の醍醐味といえるでしょう。

(英文学科教授)



## 図書館によせて(歴代図書館長より)

### 「取りて読め」

新海 邦治

退職して十年余りも経つというのに、まだ時々在職時代の夢を見る。それも大抵は、授業時間に遅れそうだとか、演習の準備が不十分だとか、胃が痛くなるような事ばかりである。目白図書館の上層階は、かつて研究室や演習室に当てられていたから、私の悪夢の主たる舞台はこの図書館棟だったわけである。しかしここでの研究・教育の日常が、当時、悪夢に満ちていたわけでは勿論ない。研究室と演習室と図書館がコンパクトに纏まった環境は、私にとってむしろ便利で居心地の良い場所であった。必要が生じたり、閑な時間が出来たりした時は、気軽に図書館を利用したものである。幸いにも図書館は上代タノ先生のお陰で当初から開架式であった。当時としては珍しく、私の経験の範囲でも初めてのタイプだったと思う。

その後、1990年に人間社会学部が西生田校地に誕生することになり、それに伴って西生田にも新たに図書館が設けられたが、こちらも当然ながら開架式を採用していた。新学部に所属することになった私は、目白図書館を利用する機会が自ずと減っていったが、やがて図書館長の職を兼務することになった時、目白で与えられた館長室は、かつて授業で学生たちを悩ませた記憶の残る演習室のひとつであった。図書館棟との再会は殆ど十数年ぶりのことではあったが、図書館の、特に書架の立ち並ぶ区域の雰囲気は、昔の名残りをよく留めているように感じられた。Tolle et Lege(取りて読め)とは、古代アレクサンドリア図書館の標語だったとも言われる。書物は直接手に取ってこそ生きるものであろう。古代の書物はパピルス紙や皮革紙の巻物だったが、思えば古代図書館もやはり開架式だったのである。目白図書館の書架の間に幽かに漂う本の匂いと、春に先がけて館の入口に深紅の花をつけた紅梅が、私には未だに印象深い。

(第12代図書館長：2003年4月～2006年3月在任)

## 知の兵士と館員

西山 力也

2006年4月館長就任以来、おのずと図書館について考えるようになった。「音も立てずに利息を生み出す巨大資本を眼前にするが如き」とは、図書館の書架を埋めつくす本の壮観を前にしたゲーテの言葉。日本女子大学目白図書館はさほど大きくはないが、そこには静謐な空間があり、蔵書約65万冊がいつか生み出される価値を秘めてひっそりと息づく。在任時の2007年夏、友人のスペインの作家・翻訳家 Rosa Sala 女史が来訪、その際の氏の印象記が目白図書館の姿をよく捉えている(図書館だより No.131)。「重なったり、斜めになったり、乱雑に積み重ねられた本など、ヨーロッパの大学図書館ではむしろ普通の光景だが、ここではいっさい見当らない。完璧なまでに整然と並んだ本は、さながら知の兵士の隊列の観、これは…全館員のたゆみない努力の賜物なのであろう」

全館員のたゆみない努力—館長になるまで私には、利用者として、館員の仕事は本の貸出や返却というイメージしかなかったのだが、仕事の全容を知るに至って、図書館司書たる専門職の責任と努力を痛感、認識を新たにした。人と本、利用者と資料をつなぐ、この役割を図書館組織の中で果たす、そのためには選定、発注、受入、分類、目録作成、蔵書管理などに人員を配置、運営に当る、むろん合議が不可欠…という訳で会議が多くて私には辛かったが、精密な議論には驚かされた。

現図書館には百年館高層棟が建つまで文学部研究室が入っていて、住人であった私にはその意味でも感慨深い。来年4月、日本女子大学創立百二十周年記念事業として新図書館への移転、新天地の斬新な建物の中で、現図書館の創設者上代タノ学長の理念、全開架方式継承のもと、館員の努力の象徴、知の兵士の隊列はいかなる様相を呈するのか、これまで以上に閲兵・閲覧をいざなう優しさにつつまれてあれ、軟着陸を、そして新たな飛翔を、と祈念している。

(第13代図書館長：2006年4月～2008年3月在任)

## 図書館の思い出

島崎 恒藏

私は、2010年4月から定年退職する2015年3月まで図書館長を務めさせていただいた。この間の大きな流れとしては、情報インフラ環境等が整備され、利用者の利便性が大きく拡大したことであろう。また従来からの協定校に加え、新たにお茶の水女子大学、跡見学園女子大学との図書館の相互利用、さらに近隣住民への図書館開放なども進んだ。しかし半世紀近い活動実績を有する「日本女子大学図書館友の会」の解散（2013年）は、時代の流れを感じさせられる出来事であった。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、この年の大学の卒業式が中止となるなど、学園に前代未聞の混乱をもたらした。図書館に関しては、目白、西生田両図書館ともに蔵書の散乱・破損などが発生し、数日間の臨時休館を余儀なくされる事態となった。また、その後の電力供給不足による節電要請は、図書館の開館スケジュールを圧迫し、特に夏場に四苦八苦したことも記憶に残っている。

目白図書館正面に掲げられたラテン語の標語「VERITAS VIA VITAE」についても、忘れがたい思い出がある。標語の解釈については歴代の関係者が、様々な説明をしてきた経緯がある。この点に鑑み、福田陸太郎館長の時代に「生を通しての真理」とする統一見解が打ち出された。2012年頃と記憶しているが、英文学科の川端康雄教授から、この解釈に対する疑義が寄せられた。私もこれまでの図書館資料を調査し、図書館だよりの146号に経緯と見解を述べさせていただいたが、川端教授は2013年3月発行の文学部紀要において、この標語は「Truth is the way of life」と解釈すべきであることを、精緻な調査を背景に述べておられる。興味のある方は、是非、これらの資料をご参照いただければと思う。

120周年記念事業の大きな柱である新図書館建設の準備作業にあたったことも、自分の記憶としてはまだ新しいが、昨年の10月に起工式が行われ、2019年1月には完成予定であると聞く。大学の教育・研究の拠り所として、一層の存在感を示す新図書館になることを念願するものである。

(第15代図書館長：2010年4月～2015年3月在任)

## 目白図書館によせて

平館 英子

半世紀以上前、大学に入学して、図書館正面の上部に掲げられたラテン語「VERITAS VIA VITAE」を見上げた時の緊張感は、今も鮮明に記憶されている。開架式の書棚から、自分で直接書籍を取り出せる自由さ、窓際の自分なりの指定席、友人達と自主ゼミの打ち合わせをした共同研究室等々、コピー機もパソコンも全く無い時代だったが、私にとって図書館は4年間の居場所であった。

2015年4月からの1年間、図書館長に就任した時に、新図書館の構想で直面したのは、IT環境の整備と共に2008年度の中教審の答申以来の、学生たちに主体的・能動的な学修への切り替えを促す、学士課程教育の質的転換への要請であった。その学修空間の中心に図書館を位置づけていたからである。新図書館はどうあるべきかと試行錯誤している過程で、現図書館を開館した際の記念冊子（1964年6月23日発行）が見つかり、そこに書かれた上代タノ元学長のことばに瞠目した。

本学の伝統的な教育理念である「自主性と創造性」を学問研究に、また人間形成に徹底するためには、(中略)、学生相互間の自由討議、殊に学生が自らテーマを持って自主的な独立の研究をする機会が与えられなければならないことを思い、その機能を果す近代的図書館の必要を痛感しておりました。

主体的・能動的な学修への志向がすでに言い尽くされていた。現図書館が上代先生のごような思いが体現されたものであるからこそ、図書館が居場所であり得たのだった。その秋、図書館4階に、図書館員の発案により、泉会のご寄付を受けて、新図書館への準備の意味も込めた「泉ラーニング・スペース」が設けられた。IT環境を備え、主体的・能動的な学修とされるアクティブラーニングが見える形にした空間である。現図書館開館時の理念が継承されていることを確かに感じていた。

(第16代図書館長：2015年4月～2016年3月在任)

## 年表と写真で振り返る図書館（目白）

いよいよ、新図書館への移転が近づいてきた。正門から目白通りをはさんで見ると新図書館の姿が日に日に大きくなっていく中、新図書館での資料配置の検討等であわただしい日々が続いている。

現図書館は1964年、東京でオリンピックが開催された年に開館した。当時は下の写真のように4階建て、1973年に5階、6階が増築された。まだ国内では珍しかった全開架（利用者が書架に自由にアクセスできる方式）での運用は設置当時からのものである。

回転扉に向かって右側のレンガ壁にある「定礎」には、開館の約1年前の日付が刻まれている。この文字は、現図書館の生みの親とも言うべき第6代学長、上代タノ先生の筆による。

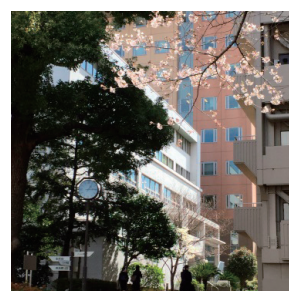
現図書館開館の年の「学事報告」を見ると、年間の館外貸出数は和



書53,169冊、洋書が5,657冊（計：58,826冊）、1日の平均貸出数が251冊とある。また、「6月23日新図書館開館以来、全国各地（海外からの来館者もあり）各方面よりの来館者が絶えない。現在までの総数1,040

人である」との記載がある。「来館者」は「見学者」の意と思われるが、はたして新図書館開館後はどのような数字となるのだろうか。

なお、移転作業に伴い、年度末の2月～3月は閉館となる。この間、図書館入り口付近は作業のため閉鎖され、返却ポストも移動される予定である。利用者の皆さんには大変ご不自由をおかけするが、新図書館がオープンし、利用が再開できるまでしばらくお待ちいただきたい。また、この間の貸出期間、冊数の変更等を図書館ホームページでお知らせしているので、ご確認をお願いしたい。



### ✧図書館（目白）簡易年表✧

1964（昭和39）	5月31日	図書館棟竣工
	6月23日	図書館開館式
	10月20日	『日本女子大学図書館だより』第1号発行
1965（昭和40）	6月	日本女子大学図書館友の会創設
1971（昭和46）	11月	上代タノ平和文庫開設
1973（昭和48）	4月	図書館棟5～6階増築、運用開始
1989（平成元）	10月	図書館システム（JWULIS）始動
1990（平成2）	4月10日	西生田図書館開館
1993（平成5）	12月	学術情報センターNACSIS-CAT接続
1996（平成8）	11月	日本女子大学図書館ホームページ開設
2002（平成14）	5月	入館システム運用開始
2003（平成15）	4月	図書館棟4～6階改修、運用開始
2011（平成23）	4月	図書館システム更改、ポータルサイト（My JWULIS）サービス開始
2013（平成25）	3月	日本女子大学図書館友の会閉会
2014（平成26）	4月	日本女子大学学術情報リポジトリ公開
2015（平成27）	11月	泉ラーニング・スペース（目白）開設
2016（平成28）	6月	泉ラーニング・スペース（西生田）開設
2018（平成30）	4月	図書館システム更改、モバイルサイトサービス開始
2019（平成31）	2月～3月	新図書館へ移転作業のため閉館



## 2017（平成29）年度上代タノ平和文庫購入資料紹介

昨年度中に「上代タノ平和文庫」の蔵書として購入された図書の一覧をご紹介します。

「上代平和文庫」は、現図書館が開館した当時第6代学長であった上代タノ先生が寄贈された846冊を基に創設され、ご遺志を継いで現在も継続収集が続けられている。

現在の図書館では5階に置かれているが、新図書館では4階に設置される予定で、壁面にある上代先生の肖像、記念プレートも共に移動する予定となっている。一部の資料を除いて貸出ができることもかわらない。新図書館への移転後も、ぜひこの文庫に親しんでいただきたいと思います。

	請求記号	資料情報
1	319.8  Tak	ドイツの平和主義と平和運動：ヴァイマル共和国期から1980年代まで / 竹本真希子著. -- 法律文化社, 2017.
2	319.8  Nin	人間の安全保障と平和構築 / 東大作編著. -- 日本評論社, 2017.
3	210.75  Shi	知らなかった, ぼくらの戦争 / アーサー・ピナード編著. -- 小学館, 2017.
4	319.8  Mae	旅する平和学：世界の戦地を歩き傷跡から考える / 前田朗著. -- 彩流社, 2017.
5	319.8  Naz   2	「核なき世界」への視座と展望 / 吉川元, 水本和実編. -- 法律文化社, 2016. -- (なぜ核はなくならないのか? 2).
6	316.1  Ima	いまこそ知りたい平和への権利48のQ&A：戦争のない世界・人間の安全保障を実現するために / 平和への権利国際キャンペーン・日本実行委員会編著. -- 合同出版, 2014.
7	369.38  Oga	私の仕事：国連難民高等弁務官の10年と平和の構築 / 緒方貞子著. -- 朝日新聞出版, 2017. -- (朝日文庫; [お79-1]).
8	319.8  Gal	日本人のための平和論 / ヨハン・ガルトウング著; 御立英史訳. -- ダイアモンド社, 2017.
9	319.8  Kat	ビキニ・やいづ・フクシマ：地域社会からの反核平和運動 / 加藤一夫著. -- 社会評論社, 2017.
10	329.5  Ish	ケースで学ぶ国連平和維持活動：PKOの困難と挑戦の歴史 / 石塚勝美著. -- 創成社, 2017.
11	312.199  Oki	沖縄謀叛 / 鳩山友紀夫 [ほか] 編著. -- かもがわ出版, 2017.
12	210.762  Nak	占領は終わっていない：核・基地・冤罪そして人間 / 中村尚樹著. -- 緑風出版, 2017.
13	611.3  Sen	貧困と飢饉 / アマルティア・セン [著]; 黒崎卓, 山崎幸治訳. -- 岩波書店, 2017. -- (岩波現代文庫; 学術; 366).
14	213.65  Mas	多摩の戦争遺跡 / 増田康雄写真・文. -- 新日本出版社, 2017.
15	369.37  Ima	戦後日本の反戦・平和と「戦没者」：遺族運動の展開と三好十郎の警鐘 / 今井勇著. -- 御茶の水書房, 2017.
16	985  Rol	マーシャの日記：ホロコーストを生きのびた少女 / マーシャ・ロリニカイテ著; 清水陽子訳. -- 新日本出版社, 2017.
17	391.1  Ish	私たち, 戦争人間について：愛と平和主義の限界に関する考察 / 石川明人著. -- 創元社, 2017.
18	319.8  Wat	私たちは戦争を許さない：安保法制の憲法違反を訴える / 安保法制違憲訴訟の会編. -- 岩波書店, 2017.
19	235.068  Chi	ジャック・シラク：フランスの正義, そしてホロコーストの記憶のために：差別とたたかい平和を願う演説集 / ジャック・シラク著; 野田四郎訳. -- 明石書店, 2017.
20	319.8  Hir	核を葬れ! : 森瀧市郎・春子父娘の非核活動記録 / 広岩近広著. -- 藤原書店, 2017.
21	367.2  Kok   2	世界を変えるのは, あなた / 国連 NGO 国内女性委員会編. -- バド・ウィメンズ・オフィス, 2017. -- (国連・女性・NGO; Part 2).
22	319.1021  Wad	米朝戦争をふせぐ：平和国家日本の責任 / 和田春樹著. -- 青灯社, 2017.
23	316.1  Sek	生存権・戦争と平和：哲学的考察 / 関新助著. -- 彩流社, 2017.
24	319.8  Ise	主権なき平和国家：地位協定の国際比較からみる日本の姿 / 伊勢崎賢治, 布施祐仁著. -- 集英社クリエイティブ, 2017.
25	559.7  Oda	届かなかった手紙：原爆開発「マンハッタン計画」科学者たちの叫び / 大平一枝著. -- KADOKAWA, 2017.
26	319.9  Aka	カンボジア PKO 日記：1991年12月～1993年9月 / 明石康著. -- 岩波書店, 2017.
27	319.8  Hos	戦後の「平和国家」日本の理念と現実 / 星野昭吉著. -- 同文館出版, 2017.
28	319.8  Kak	核軍縮平和：イアブック：市民と自治体のために / ピースデポ・イアブック刊行委員会企画・執筆; 2005 - 2015-17. -- ピースデポ, 2005.
29	329.36  Ito	「国境なき医師団」を見に行く / いうせいこう著 = Report of Médecins sans frontières / by Seiko Ito. -- 講談社, 2017.
30	210.6  Yam	日本の戦争：歴史認識と戦争責任 / 山田朗著. -- 新日本出版社, 2017.
31	329.36  His	非戦・対話・NGO：国境を越え, 世代を受け継ぐ私たちの歩み / 大橋正明 [ほか] 編著; 内田聖子 [ほか] 著. -- 新評論, 2017.
32	319.8  Nis	いま, 「非戦」を掲げる：西谷修対談集 / 西谷修著. -- 青土社, 2018.
33	319.8  Kik	絶対平和論：日本は戦ってはならない / 菊地昌実著. -- 新評論, 2018.

(受入日順)

## 平成30年度夏期スクーリング開館について

今年の夏期スクーリング開講期間は8月5日(日)～29日(水)と例年より3日間短くなったが、図書館の夏期スクーリング開館は8月6日(月)～9月1日(土)の4週間で例年同様に24日間、開館時間は<月～金>8:45～20:00、<土>8:45～18:00であった(スクーリングの授業時間延長に伴い昨年度より月～金1時間延長)。

今夏は記録的猛暑となり、8月8日(水)台風上陸に伴い18時閉館となる等、悪天候にも見舞われたが、図書館で熱心に学修する受講生からは、今年度4月より新しくなったOPACの検索方法等、多くの質問が寄せられた。また、「泉ラーニング・スペース(目白)」のラーニング・サポーターへの学修相談、モバイルプリンター(貸出機器)の利用等、積極的に施設を使う受講生の姿も見られた。



夏期スクーリング時の2階閲覧室風景

### 夏期スクーリング開講期間の利用状況

年度	H30	H29	H28
開館日数	21	24	24
入館者数	3,069	3,913	3,675
1日平均	146.2	163.1	153.2
最高	276	247	265
最低	92	120	75
受講者数	707	708	744
登録者数	76	86	93
1日平均	3.7	3.6	3.9
更新者数	135	139	178
来館率	29.9	31.8	36.5
貸出冊数	784	1,005	972
1人当たり			
1日平均	37.4	41.9	40.5
最高	71	78	65
最低	11	15	19
貸出日数	21	24	24
複写枚数	4,452	7,056	7,628
1日平均	212	294	317.9
一般学生・教職員その他の貸出	1,098	1,177	1,243
1日平均	52.3	49.1	51.8

今年の夏期スクーリング開講期間の利用状況は左表のとおり。受講者数と入館者数は減少したが、参考係利用者数は昨年度より増加した。夏期スクーリング期間に通常期と同様に My JWULIS へログインし、利用状況の確認、貸出更新、貸出中図書予約、目白・西生田間図書館所蔵図書取り寄せ等ができるようになって5年目、非来館型サービスの浸透も入館者数に影響したといえる。しかし、この時期は一般図書の夏休み貸出5冊に加え、通信教育図書室(図目通信)の図書2冊を7日間借りることができる。

来年度受講する方には新図書館での積極的な来館学修をお勧めする。(館員・閲覧係 中澤恵子)

### 参考係利用状況(質問処理件数)

年度(日数)	H30(21)	H29(24)	H28(24)
一般学生・教職員	27	27	49
スクーリング生・その他	21	11	31
合計	48	38	80
1日平均	2.3	1.6	3.3

**編集後記** 目白の新図書館の建築現場からクレーンの姿が消えた。4月から新図書館での活動が始まることについて、正直まだ実感がわかないところもある。今号では、歴代4人の図書館長から現図書館の思い出についてご寄稿いただいた。一日一日少なくなる、現図書館での日々を大切に刻んでゆきたい。成瀬記念館では12月20日まで「日本女子大学図書館—“VERITAS VIA VITAE”は永遠に」と題して展示が行われている。ぜひ足をお運びいただきたい。(浜口)